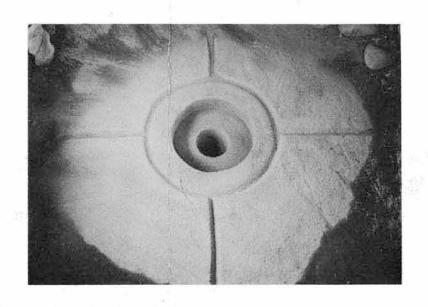
# 山王廃寺跡第2次発掘調査概報



前橋市教育委員会

古墳文化の頃、東国社会の中心として、繁栄をきわめた前橋市域は、7世紀の後半以降、仏教文化が侵透し、8世紀に入ると総社町山王の地には寺院が建立された。山王廃寺のことである。この存在を示す遺構や遺物には、塔心礎、石製鴟尾、根巻石さらには緑釉陶器などがあり、これらにより山王廃寺は、稀にみる豪荘華麗な古代寺院と推定され、文化財として、あるいは古代史研究の資料として、極めて貴重なものとされている。

ところで、こうした山王廃寺跡に対する本格的な発掘調査は、最近までほとんどなされておらず、伽藍配置は勿論のこと、その規模、 形状等は全く不明であり、この解明は、研究者をはじめ多くの関係 者から強く要望されていた。

こうした状況の中にあって、前橋市教育委員会では、昨年度は、 該当地域の土地改良事業の実施に先がけて、寺域確認のための発掘 調査を行ったが、本年度からは長期的な発掘調査を計画し、その第 一年次の調査を、国庫および県費補助を得て、8月18日から31日ま での間に実施した。

この度の発掘調査は、予想された建造物跡にはおよばず、その周辺部に終始した。よって、特に目立った成果はなかったと聞く。しかし、これが、今後の調査の大きな指針となることは勿論、山王廃寺解明の一契機となることは明らかであり、その意義することは大きいものと信じている。

ここに発掘調査の概報を刊行することに際し、これが実施にあたり、ご指導、ご協力いただいた関係各位に、改めて謝意を表します。

昭和51年3月12日

前橋市教育委員会

教育長 伊藤 藤順

# 凡 例

- 1 この概報は昭和50年度文化財保存事業費の国庫、県費 補助金を得て、前橋市教育委員会が山王廃寺跡緊急調査 事業として実施した概報である。
- 2 発掘地は前橋市総社町総社2404-1 および総社町昌楽 寺廻り村北1431の平石三夫・都丸民司両氏の所有地であ り、協力を得た。
- 3 発掘調査は前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係職員全員が発掘担当者となり、昭和50年8月18日~8月 31日に実施した。
- 4 調査の実施にあたり、調査員を飯野邦彦(前橋工業高等学校教諭)・藤岡一雄(共愛学園教諭)・都丸肇(津 久田小学校教諭)氏等に依頼し、また群馬大学歴史研究 部学生・前橋工業高等学校歴史研究部生徒等の協力を得 た。
- 5 専門分野の指導は群馬大学名誉教授尾崎喜左雄博士・ 群馬大学教授新井房夫博士の現地指導を受けた。
- 5 この報告書の執筆・編集については上記文化財保護係 職員があたったが、執筆分担は次のとおりである。
  - **I・Ⅱ-1・Ⅳ** 石川克博、**Ⅱ-2・Ⅲ-1・2** 相 澤貞順、**Ⅲ-3・4・**5 川合功、**Ⅲ-6** 中村富夫 **V** 松島栄治

# 目 次

- 3	
	Ť≯
•	Л.

I	発掘調査にいたる経過	1
Π	発掘調査	2
	1 発掘調査の方法	<u>2</u>
	2 地 層	4
Ш	遺 構	6
	1 Aトレンチ	6
	2 Bトレンチ	7
	3 Cトレンチ	
	4 Dトレンチ	9
	5 Eトレンチ	
	6 Fトレンチ	10
IV	遺 物	12
	1 瓦 類	12
	2 鉄製品	16
	3 土器類	16
V	結	19

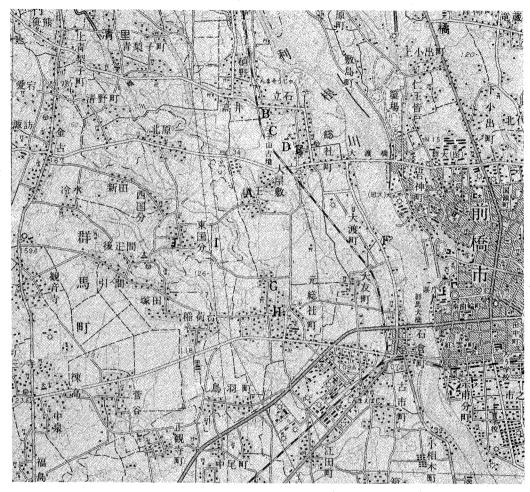
#### 図 版 目 次

- 1. 発掘地点付近
- 2. Aトレンチ内ピットーイ
- 3. Bトレンチ内瓦の出土状態
- 4. Bトレンチ内1・2号住居跡
- 5. Eトレンチの状態
- 6. Fトレンチの状態
- 7. 軒丸瓦
- 8. 軒平瓦
- 9. 軒平瓦・その他の瓦
- 10. 土器類
- 11. 土器・その他
- 12. 山王廃寺跡現況図
- 13. Aトレンチ平面図および西側地層実測図
- 14. Bトレンチ平面図および東側・南側地層実測図
- 15. Cトレンチ平面図および南側地層実測図
- 16. Dトレンチ平面図および北側地層実測図
- 17. Eトレンチ平面図および北側地層実測図
- 18. Fトレンチ平面図および地層実測図
- 19. トレンチ内遺構全体図
- 20. 軒丸瓦拓本
- 21. 軒平瓦拓本(1)
- 22. 軒平瓦拓本(2)
- 23. 文字瓦・その他の瓦拓本、および鉄釘実測図
- 24. 土器類その他実測図および拓本

#### 插 図 目 次

- 1. 遺跡の位置図
- 2. トレンチの位置図
- 3. 発掘風景
- 4. 地層柱状図
- 5. Cトレンチ内3号住居跡
- 6. Fトレンチ東壁付近の状態
- 7. 3号住居跡遺物出土状態

# Ⅰ 発掘調査にいたる経過



類別 1 遺跡の位置図(5万分の1) A山王廃寺 B総社二子山古墳 C愛宕山古墳 D宝塔山古墳 E蛇穴山古墳 F王山古墳 G総社神社旧地 H国府推定地 I国分尼寺 J国分僧寺

山王廃寺跡は前橋市総社町総社字昌楽寺廻り地内に所在する。

本遺跡のある総社町山王地区は、前橋市街地から利根川を隔てた西郊の純農村地帯で、古くから養蚕種の生産で知られている。近年、前橋市街地の拡大は著しく、この地の周辺も、高前バイパスの開通以来、産業道路ならびに関連道路の整備・問屋団地の造成・企業進出等により、急速な都市化が進んできている。こうした近年の産業構造の変化にともなって、産業道路に隣接する山王地区も農村から近代的都市近郊農村へと漸次変貌を遂げつつあり、畑地の宅地化も目立ちはじめている。このような社会状勢の変化の中にあって、耕地は旧態依然のままであるため、これが近代化へのひとつの障害とされてきた。そこで、地権者は土地改良法に基く、『山王土地改良区設立準備会』を設立し、当該地区の土地改良事業を昭和49・50年度の2ヵ年にわたって実施することになった。

このような開発行為が、本遺跡地内外において進行し、とりわけ、土地改良事業実施を目前に控

えている一方では、遺跡の本格的な解明はなされないまま今日に至っていた。

しかしながら、大正年間に塔心礎が発見されて以来、耕作等の機会に数々の貴重な遺構・遺物が出土し、全国的にも注目を浴びるようになってきた。ちなみに、そのうちの主なものを記すると次のとおりである。

①塔跡および中心礎石

昭和3年 国指定史跡

②石製鴟尾•石製鴟尾残片

昭和11年

国認定重要美術品

③根巻石

昭和28年

国指定重要文化財

④緑釉水注・埦・皿および銅埦 昭和29年

国指定重要文化財

このほかに、塑像頭部・古瓦・および礎石群などがある。そして、これらの遺構・遺物から、白鳳期創建の荘大な寺院跡と考えられている。が、全貌を知るにはまだ、断片的な資料にすぎず、寺の規模・寺域・性格等は把握されていない。したがって、土地改良に対応した遺跡保存措置をとるためには、資料が充分ではなく、昭和49年度、改良事業着手に先立って、「山王廃寺発掘調査団」を結成し、発掘調査を実施した。

調査の結果、塔心礎の北約120mの地に、掘立柱建築遺構の一部分を発見するとともに、心礎の北100m東100mの北東の地点で、金箔付炭化物(仏像の台座の一部と推定される)を発見し、少なくとも心礎の北は約120m、東は100mの線上までは寺域内であることが確認された。寺域の南限・西限については、寺院と直接関連する遺構にはあたらなかったが、多数の住居跡が発見された。また、多量の瓦・土器・鉄製品等を出土し、遺跡解明の資料を充填した。

発掘調査終了後、一応、推定寺域内とみられるところは土地改良から除くことが申し合わされ、 その後、昭和49年度土地改良事業は推定寺域南限近くまで実施された。

ところで、本遺跡推定寺域内は、従来より、農家の密集地であって、約50%は宅地で埋まり、残りの50%が畑地などになっている。そして、宅地内にも相当遺構があるとみられてきた。今までに、遺跡の重要性が叫ばれつつも、調査されずにきたひとつの背景として、宅地の密集地であったこともあげられよう。昭和49年度には図らずも、土地改良事業を機に調査が実施されたが、遺跡の重要性は関係者の間でさらに強調されるところとなった。土地改良事業および進行する宅地化などさし迫った開発行為に対して、昭和49年の調査のみでは不充分であり、学術的にも緒についたばかりである。

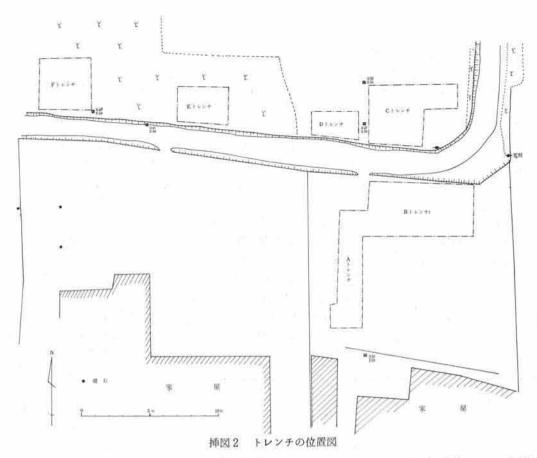
もし、調査せずに放置するならば、残された畑地も、早晩、宅地と化し、本遺跡の規模・性格も不明のままとなり、保存・活用がますます困難となる恐れが生じてきた。かかる状況を憂慮した国・県も、緊急調査の必要性を認め補助金の交付を決定した。発掘調査費は、国庫・県費補助金および市負担を合わせた総計100万円で、前橋市教育委員会が主体となって発掘調査が実施された。

# Ⅱ 発掘調査

#### 1. 発掘調査の方法

昭和50年度の調査においても、ひき続き寺域・寺の規模・性格の解明に主眼があったが、予算等種々の制約の中で、どく限られた一部の地域の調査にとどまらざるを得なかった。しかし、有力な遺構を検出し、寺域など当初の目標達成の手がかりを得ると同時に遺跡保護の推進力にしょうということが考えられた。かかる見地から、礎石群の存在がほぼ明確で、しかも心礙の北40m東30m付近の伽藍配置中心部に近いことから有力な遺構があるとみられている地を選定した。

礎石群があるとみられている場所は、心礎の北40m 東30m の阿久津丑治氏宅地内である。とこは他よりも土地が一段高まっており、東隣、西隣の家にも高まりが続いている。これらを一度に調査



できない関係上、どこから先に手をつけるかが問題となったが、地権者の事情を優先して 考慮した結果、本年度は、東隣の平石氏宅地とその裏の都丸氏畑地を掘ることに決定した。

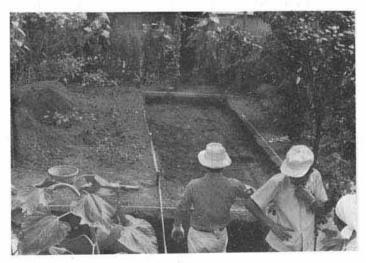
調査にあたっては、阿久津氏宅地以外にも礎石を有するような遺構があるか否かということがひ とつの焦点となった。したがって、当然、トレンチの入れ方もそうした点を考慮し、阿久津氏宅地

内の礎石であるといわれている 石をボーリング棒で探し、それ を東西及び南北線上に延長した ところにトレンチがかかるよう にした。

一方、寺の調査にあたっては、 伽藍配置を平面でとらえること が必要であり、昨年度の調査結 果も一貫して整理できるようグ リッド設定を行なった。

以下、その要点を記する。

(1)塔心礎舎利孔の中心を基準原点として南北(磁北) 東西に軸線をひき、グリッド設定を行なう。なお、心



挿図3 発掘風景

礎の上面をレベル原点とする。

- (2)軸線は10 m ごとに区切って各軸線に囲まれた地域を基準の一区画とする。
- (3)  $\mathbb{Z}$  の 10m 平方の グリッドは各辺をさらに 1 辺  $2m \times 2m$  の小区画 25 個に細分して基本単位とする。

しかしながら、狭い宅地内において、グリッドの区画線にのっとったトレンチのみを設定することは不可能である。おおむね、グリッドの区画にあわせても、土地の状態にあわせねばならなかったことと発掘の進行状況に応じた拡張とによって、多少変化したものとなった。しかし、基本区画に照らして位置を把握できるようにした(挿図 2)。このようにして設けたトレンチを便宜上A~Fトレンチとした。

それぞれのトレンチのグリッド上の位置を示すと次のとおりである。

A トレンチ N34 E50, N42 E51, N42 E48, N34 E48, の4点に囲まれた範囲(多少拡張あり)

Bトレンチ N39 E 58, N42 E 58, N42 E 50, N39 E 50, の4点に囲まれた範囲 ( // )

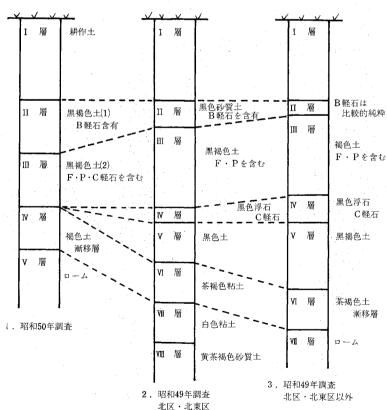
Cトレンチ N58E57, N50E57, N50E50, N48E50, の4点に囲まれた範囲及び拡張区N46

E54, N48E54, N48E50, N46E50 (多少拡張、縮小あり)

Dトレンチ N46E50, N48E50, N48E46, N46E46 の4点に囲まれた範囲(多少縮小)

Eトレンチ N48 E40, N50 E40, N50 E36, N48 E36 の4点に囲まれた範囲

Fトレンチ N48E30, N52E30, N52E26, N48E26 の4点に囲まれた範囲(多少拡張)



揷図4 地層柱状図

#### 2. 地層

山王廃寺周辺の地層を やや広範囲に見ると、総 社町一帯は前橋台地面の 北端付近に位置している。 榛名山裾野の清里地域は 榛名火山起源の火砕岩類 が前橋台地を覆い、一方 前橋市街地大半の地域は 旧利根川の広瀬川低地帯 になっている。これらに 狭まれた地域に総社町が ある。山王廃寺の北東か ら東へは八幡川が流れて いる。この川は小さな河 川であるが、清里から総 社へ流れ込み、この周辺 にあっては比較的明確な 浸蝕谷を形成している川 である。前橋台地は火山 泥流堆積物 (前橋泥流堆 積物)とその上の火山灰 質シルト粘土(水成上部 ローム層)とからなっており、山王廃寺周辺においてはこの水成上部ローム層が場所によりわずかながら様相を変えている。今回の調査は近接した地域の調査であり、ローム層にほとんどおよんでない点もあり、発掘地点による地層の大きな相違は見られなかった。したがって全般的には柱状図1の様な層序が今回の発掘調査の結果ほぼ共通して見られた。柱状図1の各層は以下の様な状態である。

- I層 耕作土 厚さ20~30㎝が普通で、場所により40~50㎝ある。B軽石(浅間山軽石:1108年 <天仁元年>、または1281年<弘安4年>噴出と考えられている)以後の浮石を含み、粒子 の荒い、ふかふかしている土。
- Ⅱ層 黒褐色土(1) 厚さは15~20cmある。B軽石を多量に含み、粒子は荒い。上端あるいは 層中に瓦を包含している。
- III 層 黒褐色土 (2) 厚さ25~30㎝で、場所により10~20㎝の地点もある。F・P (ニッ岳軽石:600年~610年頃の墳出と推定されている)とC軽石(浅間山軽石:4世紀頃の噴出と考えられている)とを含み、粒子は粗く、しまっている。
- IV層 褐色土、ロームへの漸移層である。
- V層 ローム、部分的に砂質分が強くあるいは粘土化の進み方が異なっている。

概略以上のような層序であるが、場所により、部分的にⅢ層とⅣ層との間の黒色土にC軽石を含む層がみられた。また、耕作等により、Ⅱ層がなく、Ⅰ層からⅢ層へ続く地点があった。Ⅲ層はそれぞれの発掘場所により混入物等に相違がみられ、細分される可能性がある。

これらの層序のなかで遺構を構築している面は数層に分かれている。遺構の種類も柱穴状のピットが数種類あり、竪穴住居跡も発見されている。Bトレンチの瓦の敷かれたような状態はⅡ層の上端でみられた。柱穴状ピットはⅢ層からとⅣ層から掘りこまれているのとがあった。BトレンチおよびCトレンチで発見された住居跡はⅡ層下およびⅣ層から掘りこまれていた。

これら今回の調査の地層と前回の昭和49年調査の地層とを比較してみたい。

昭和49年の調査は寺域確認のための調査であり、塔心礎を中心に可能なかぎり方二町(一町はおよそ  $109\,m$  前後と推定されている)という推定寺域に近い点を選んで調査を実施した。その結果の地層の状態は柱状図の 2 と 3 である。 2 は寺域に関係する遺構、遺物を確認した北区および北東区の柱状図であり、 3 は住居跡を発掘した北西区、南西区、南東区等の状態である。これら柱状図を見ると、 2 と 3 ではロームから漸移層にかけて顕著なように 3 の方が全般的に乾燥した状態を示しているのに対して、 2 の方は遅くまで水の影響を受けていた様相を示している。今回の発掘地点1は沖積層を見ると、 2 ・ 3 に比して B 軽石以前の堆積が浅く、 F ・ P および C 軽石の包含層が混合されている。沖積層の C 軽石以降の堆積の状態は 2 と 3 が近似しているが、水の影響を遅くまで受けているという点では 1 と 2 が位置的に近接しながら、地層の状態は 1 が 3 に近い様相を示していることが注目される。

今回の発掘地点は前述のように、昭和49年の調査の際に寺に関係する遺構の発見された北区および北東区と塔心礎との中間にあたる地点の発掘であった。しかし、地層を見るとこれら北区および北東区に比して、

- ① 水の影響を遅くまで受けていた様相ではない。
- ② C軽石、F・Pの包含層がそれぞれ明確な一層をなしている状態ではない。 という相違がみられる。

## Ⅲ遺構

今回は前述のようにA~Fの大小6つのトレンチを発掘し、寺に関係あると考えられる建築遺構の柱穴状ピットをはじめ、竪穴住居跡も調査した。これらの遺構はⅢ層からとIV層からの掘りこみ面の異なるものがあり、また柱穴状ピットも形態の相違するものが発見された。建築遺構の柱穴は一つの面として調査された時、一つ一つの柱穴も柱穴としての性格を明らかにし、建築遺構も明確になるものと考えられる。今回の調査では面としての調査にいたらなかったので、ピットの性格を明らかにすることはできないが、発掘された各ピットの規模・形態等を中心として以下、各トレンチの状態を記述する。

#### 1 Aトレンチ

このトレンチでは平面長方形の非常に掘面のしっかりしたピット1つと円形のピット2つと楕円 形のややゆがんだピット1つとを発見した。

ピット一イ:平面長方形で掘面のしっかりした深いピットである。この付近では I 層下に III 層があり、このピットは III 層下から掘り込まれているが、 III 層中からこのピットの上に粘土化したロームブロックが見られ、 III 層とこのロームブロックの混土がこのピットを埋めていた。大きさは上巾  $111.5cm \times 86 cm$ 、下巾 $93 cm \times 61 cm$ 、深さ61 cmである。長方形の方位は南北中心軸が北20度西にふれている。ピットの壁面、底とも比較的凹凸はなくきれいに掘られており、ピットの底中央には $17 cm \times 18 cm$ 、深さ5.5 cmの柱受けとも見られるピットがある。

ピットーロ:トレンチ西壁に一部かかっており、全面発掘できなかったが、ほぼ円形のピットである。このピットは $\mathbb{N}$ 層の上面から掘りこまれ、 $\mathbb{C}$ 軽石を含む黒色土がピットを埋めていた。大きさは上縁径約 $60\,\mathrm{cm}$ 、下縁径約 $50\,\mathrm{cm}$ 、深さ $16.5\,\mathrm{cm}$ である。

ピットーハ:一部東壁にかかっており、完掘できなかったが、ほぼ円形の掘面がしっかりしたピットであり、このピットの底からは土師器の高台付焼形土器が出土した。この付近は I 層がピット直上までおよんでおり、Ⅲ層上面から掘りこまれ、Ⅲ層が埋めている。大きさは上縁径約70 cm、下縁径約55 cm、深さ44 cmである。

ピットーニ: Bトレンチとの境界にあり、一部はトレンチ北壁にかかっている。楕円形あるいはひょうたん形のピットで、その中にさらに不正楕円形のピットがある。この付近はII層下にII層とIV層との混土層があり、この面から掘りこまれて、II層の土がピットを埋めている。大きさは上縁径約100~cm $\times 50~$ cm、下縁約90~cm $\times 40~$ cm でこの面までの深さは24.5~cm である。中のピットは45~cm $\times 20~$ cmの不正楕円形で、深さは8.5~cmである。

各ピットの状態は以上のようであるが、ピット―イは非常に掘面のしっかりした穴であり、明らかに建築遺構の柱穴と推定される。中央に柱受けとみられる穴のあることも注目される。また、しっかりした長方形であり、方位の誤差も比軽的少ないと見られ、北20度西にふれている点は、今回のような調査方法の場合、同時代的なあるいは共通な建物を見いだしていく上で注目してよいものと考えられる。

ピット―ニは形態からみて、柱穴かどうか大いに疑問であり、ピット―ロも比軽的浅い点が疑問である。ピット―ハは円形の掘面のしっかりしたピットであり、この底から土器が出土しているが、現状ではこのピットに関係する竪穴住居はみられず、このピットも建築遺構の柱穴とがみられる。

このトレンチではピット―イのような長方形の柱穴とピット―ハのような円形の柱穴とがみられる。

#### 2 Bトレンチ

このトレンチでは、敷きつめられたような瓦の堆積・浅い溝・柱穴状ピットを含む各種のピットおよび竪穴住居跡等が発見された。

#### (1) 瓦の堆積

このトレンチでは I 層下にI5~30 cm という比較的厚い I 層の堆積がみられるが、 I 層下の I1 層上面に瓦の堆積がみられ、この I1 層中には比較的多く瓦が包含されている。瓦の堆積している範囲は B トレンチの南西隅である I1 I2 I3 I3 I4 I4 I5 cm の地点から南東隅である I4 I4 I5 cm の地点から南東隅である I4 I7 I8 I9 I9 I9 I9 I7 I9 cm 、東寄りでI7 I9 cm の範囲である。瓦分布範囲の南端の線は比較的明瞭な直線をなし、この線は東約I2 度南に向いている。西よりでは垣根の柵により、さらに広範囲にあったものが巾をせばめられたものとも見られる。中央付近には瓦のみられない部分もあるが、これは地層より耕作等最近の掘りかえしにより見られなくなったと考えられる。また、西寄りではこの堆積に接して北側に角閃石安山岩の削りかすの散布している個所があり、トレンチ東寄りでは白色の粘土化したロームが瓦の堆積にまざってあった。また、比較的一直線をなしている南端の線の東半分ではI10 cm  $\times$ 10 cm 程の大きさの石が点在していた。瓦は密集して敷かれたようにあり、瓦にまざって土器の出土も見られた。

#### (2) 溝

Bトレンチのほぼ中央に東西方向にはしる浅い溝がある。II 層は上面に瓦が密集し、層中にも瓦の包蔵がみられるが、溝はIII 層が掘られ、II 層の下端が埋めている状態になっている。溝の上端の最大巾は120cm、最小巾は72cm、下辺の巾は $26\sim41cm$ で深さは約 $12\sim15cm$ である。III 層の上面がゆるい傾斜で溝をなしている状態であり、この溝がある企画を持って人為的に作られたような痕跡は溝の断面を見るかぎりでは認められなかった。しかし、溝の南端の線の方向は東約10度南にふれており、前の瓦南端の線とほぼ同じ方向を示している点は注目される。

#### (3) ピット

ピットは大小合せて4つある。

ピットー1 前述の溝の中にあり、溝と同じくIII層の上面から掘りこまれIII 層が埋めている。大きさは $25\,cm \times 20\,cm$ の楕円形で、深さ $10\,cm$ の小さなピットである。

ピットー2 溝の縁にあり、 $\blacksquare$ 層の上面から掘りこまれ、 $\blacksquare$ 層が埋めている。上縁 $60 \text{ cm} \times 78 \text{ cm}$ 、下  $辺46 \text{ cm} \times 43 \text{ cm}$  のほば円形で、深さ20 cm のピットである。

ピットー3大形のピットで、地層からみても明確にしにくい部分があるが、2つ以上のピットが重複しているとみられる。全体の形状は不正円形で、南端はトレンチにかかっているが、現状で上端は3m×33mある。深さは74cmあるが擂鉢状をなし、底はきわめてゆがんだ形をし、さらに深い2つのピットになっている。この大きなピットはV層の上面から掘られているが、この付近では、V 層下にV 層を 上層と M 層との混土層があり、さらに砂質をおび黄茶褐色の粘土化したロームがまざって、このピットを埋めている。しかもピットの埋め方は横に漸次埋められてゆく形ではなく、黒色土、あるいはロームブロックの混土がそれぞれ様相をかえ、縦に5列になって埋まっている。その下にはば一面に混土がある。このような状態であり、また、この付近では、V 層は比較的浅く、ローム層は水成のロームとみられ、砂質化、粘土化の状態は少しの距離で異なっており、埋土か自然堆積土か判断しかねる場合がある。しかし、このピットでは下部に黒色土の混土が一面にみられた。この面の下にあるピットは87cm×77cmと55cm×67cmの楕円形のピットで、深さは大きな穴の底から10cmと8cmである。

ピットー4 1号住居跡のなかにあり、一部トレンチの南壁にかかっている。住居跡床面から掘り こまれ、住居跡を埋めてるのと同じ $\mathbf{m}$ -2層が埋めている。大きさは $\mathbf{56}$   $\mathbf{cm} \times 49$   $\mathbf{cm}$   $\mathbf{c}$  、深さは床面から 42cmである。掘りこみ面および埋土からみて、1号住居跡の遺構の一部と見られる。

#### (4) 竪穴住居跡

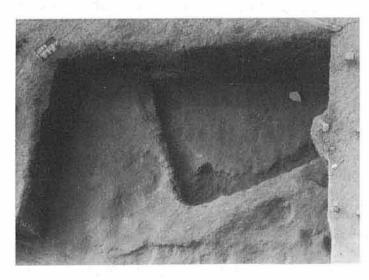
1号住居跡 トレンチの南東隅に発見され、住居跡の北西部分が発掘された。住居はIV層の上面から掘りてまれているが、この付近ではII層下に標識的なII 層とは異質なIII -1 層がある。これは II 層に砂質の黄茶褐色ロームが混入したもので、この土が、住居の掘りこみの外から、住居内にいたり、住居の上半分を埋めている。埋め土の下半分はやや異質のロームの混ざったIII -1 層である。発掘された範囲での住居の規模は北辺2.15 III 西辺1.1III で、深さは47III で、窓さは47IIII の地点に前述のピット 4 がある

2号住居跡 トレンチの北東隅に1号住居跡と重複してその北にある。この住居跡も瓦の包蔵されている  $\Pi$  層下に  $\Pi$  層があり、1号と同じ  $\Pi$  一 1 層が住居跡を埋めている。住居跡の南西隅は1号住居跡と切り合っているため、確認できなかったが、現状での西壁は2.1m で深さは36cm ある。壁下には周溝があり、この巾は5cm ~ 20cm 、深さは10cm である。1 号と2 号との前後関係は2 号住居跡の方が約10cm高いが、1 号住居跡に約10cmのはり床があり、2 号住居跡の方があととも考えられる。これら1 号、2 号住居跡の出土遺物は現在整理中である。

Bトレンチの状態は以上のようであるが、地層からみると瓦の堆積はII層のB軽石堆積以後である。このII層も比較的混入物は少ないが1次堆積とは見られない。また、2次堆積のII 層が直接溝を埋めており、溝が埋められるのは少なくとも $12\sim13$ 世紀以後と見られる。ピット1、2 もこれらと同じであり、ピット3 および竪穴住居跡は地層的には3 号住居跡と同じである。ピット3 は形態的に不明な点があり、Aトレンチのピット—イあるいはピット—ハ等の柱穴とは異質のものと考えられる。

#### 3. Cトレンチ

耕作土が、約50cm 堆積しており、Ⅱ層を欠き以下順次にⅢ層約25cm、Ⅳ層10cm と堆積し、ローム面となる。Ⅲ層が、遺物の中心包蔵層にあたり、埴輪片、瓦片、須恵器片、土師器片を出土する。遺構は、トレンチ南西の隅に、土師器使用竪穴住居(3号住居)を確認している。その他は、全く遺構らしきものは認められない。



挿図5 Cトレンチ内3号住居跡

3号住居跡 住居の北東隅が、トレンチにかかり、現状での計制値は、北壁220m、東壁240mである。非常に狭い範囲の確認となり、住居の大部分は、農道の下に埋まる。一部は、Dトレンチとの境界である地層断面作製のためのベルト下にかかる。Dトレンチには、住居がかかっておらず、地層断面ベルトは、巾1mであることから、北壁の長さは、3m前後であり、住居規模も小さなものであろう。

住居は、IV層を切り込んで構築されており、III層が埋土として落ち込んでいる。

壁の立ち上りは、約30cmであり、壁内側に沿って、巾30~65cm、深さ8cmの側溝を巡らす。側溝中には、壁柱穴と思われる小穴の痕跡は認められない。

住居内に柱穴は認められず、住居外にも、柱穴らしきものはない。住居を完掘したわけではないが、この時期の住居は、規模も小さく、柱穴がない例が多い(注 1)ことから、柱穴を持たない住居と考えられる。

遺物の出土は、埋土であるⅢ層より、土師器片、須恵器片、瓦片が認められた。完形品ないし、 完形品に近いものが、土師器杯4個出土している。床面近くからは、瓦片1個を認めた。

#### 4. Dトレンチ

Cトレンチの西、地層断面ベルト巾1mを挟んでいる。地層の状況は、Cトレンチ住居外と同じであり、遺物包含層、遺物の種類も同様である。

遺構は、ピット3個確認された。いずれも $\mathbf{W}$ 層より切り込み、埋土は $\mathbf{M}$ 層である。 $\mathbf{3}$ ピットを、ピット $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} \cdot \mathbf{c}$ と仮称すると、その計測値は次の様である。

名称	形	規模	深さ	備考
a	矩形	?	30 cm	半 掘
b	方形	32 cm	35 cm	
С	円形	42 cm	24 cm	一部未掘

ピット間の距離は、心心間で a~b 100 cm + α b~c 160 cm a~c 225 cm + α

となり、形、規模が異なり、位置にも、規則性が見られない。

3ピットとも、何らかの建築遺構の柱穴と思えるが、その規模、形を推定するには、不充分である。また、同一建築遺構とは思えない。前後関係は不明であるが、埋土から見て、そう時代差を持つとは思えない。

なお、楕円形ピットが、中央より東にかけてあるが、耕作土に埋められた最近のピットである。

#### 5. Eトレンチ

Eトレンチでは、耕作土が約40cmほど堆積しており、既にこの土中より遺物を出土する。耕作土を排除すると $\mathbf{II}$ 層となる。場所によって、多少色調が違い、褐色がかる所も認められる。遺物包蔵の中心は、この層となる。瓦片を中心として、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、緑釉陶器片を出土する。この層は約20cmの厚さである。次の層は約15cmで $\mathbf{IV}$ 層と類似するが、浅間 $\mathbf{B}$ 軽石、 $\mathbf{C}$ 軽石、 $\mathbf{F}$  Pの軽石を含む。このような層中にもわずかだが遺物が出土する。最下層がロームとなる。全体の層とも、南側に傾斜を示し、約10cm前後の比高差を示している。

北壁はぼ中央部に、径1.9mで、南側に半円状に拡がる面が確認された。この面は、原点より−42cm~−52cmのレベルで、Ⅲ層とIV層の接合部分である。硬くしまり、良く剥げる。大変薄いため地層断面図にはあらわれない。遺物も少数であるが出土している。この面を南に追ったが、撹乱のためつかめなかった。

遺物出土状態は、原点より、-24cm~-32cmを示すレベル、即ち、地層から言えば、Ⅲ層中、上部にあたる部分に、より多くの出土が見られ一面をなすように思える。しかし、この面も、地層の傾斜と同様な傾向を示し、南にいくにしたがって深くなる。この面より下からも遺物の出土は認められるが、その数は少ない。面からの出土の如何に拘らず、完形品はなく、全て破片であり、しかも小型である。

遺構は、ピット3個を検出し、それぞれ、ピット $-a \cdot b \cdot c$ と仮称した。その計測値は次のようになる。

名 称	形	規模	深さ	備考
a	略円形	$50 \times 60$ cm	40 cm	
b		50 × ? cm	68 cm	半 掘
С	矩 形?	.50 × ? cm	20 cm	半 掘

#### ピットーロ

切り込み面は、原点より-49cmのレベルからであり、IV層類似層から切り込み、ローム面を掘り窪めてつくりあげている。ピットの埋土はII層で、切り込み面はもう少し上になる可能性もある。

#### ピットーb

北半分は、区画外のため、未発掘である。硬く良く剥げる面上に位置するが、地層断面図を検討した結果、Ⅲ層上面、原点より-28cmのレベルより切り込まれていた。埋土は、2層に分けられ、上層はⅡ層である。下層は、上層と比較し、褐色が強く、軽石も少なくなる。しかし、全体としては、Ⅱ層を中心とした層であり、埋土はⅡ層としての範疇に入る。

#### ピットーC

南半分は、農道がはしるため、未発掘である。切り込み面は原点より -67cmのレベルを示し、ローム面からである。

ピットーC 付近は撹乱を受け、IV層の状態は地層との混土が目立ち、非常に不安定である。当然、切り込み面も上層に考えなければならない。

Eトレンチの状態は以上であるが、地層面、遺物出土状態、ピットの状態を組み合せ考えてみると、次のようになる。

(1) 遺物が面となり出土するレベルと、ピットーb の切り込み面レベルとが合致する。ことに一生活面が考えられる。

(2)硬く良く剥げる面と、ピットーaの切り込み面のレベルが合致する。ピットーaでは良く剥げる面を確認できなかったが、同一生活面と思える。

(3)ピットーc は切り込み面が撹乱されており、どこにつくか不明である。ピットーb と同一寸法らしい矩形の平面プランを有すると仮定した場合、ピット心々間2.45cmを計測でき、同時期、同一遺構とも思われる。しかし、ピット中心軸方向がやや異なり、弧を描いてしまう。ピットー $\alpha$ との関係はあきらかでない。

l''ット $-a \cdot b \cdot c$ 、それぞれ異なる時期と考えた方がよさそうである。

以上のようなことから、三時期にわたり、遺構面が確認され、(2)→(1)の順でつくられたと考えられる。(3)は不明と言えよう。ピットと仮称しているが、いずれも柱穴と思われ、建築遺構と推定される。しかし、狭い空間により確認したものであり、その規模や山王廃寺との関係は不明である。

注1. 前橋市の北端旧芳賀村に存する芳賀北部団地遺跡の調査(昭和48年~50年)では、土師住居231戸が発掘された。奈良~平安時代のものであるが、そのほとんどは、柱穴を持たない、辺3~4mの住居であった。

#### 6 Fトレンチ

地層は、I層が北で $28 \, \mathrm{cm}$ 、南で約 $40 \, \mathrm{cm}$ 堆積する。この耕作土を排除すると $5 \sim 10 \, \mathrm{cm}$  の厚さに II 層が堆積して III 層に続いている。 III 層は、標識的な III 層と小さい粒の砂質のローム・ブロックを含む層と、白色粘土のブロックを含む層との3 層に分けられる。これが $20 \sim 40 \, \mathrm{cm}$  堆積して IV 層となる。 IV 層の上面はレベル原点より $-20 \, \mathrm{cm} \sim -15 \, \mathrm{cm}$ を計る。 地層の状態は、Eトレンチとほぼ同じである。 なお、IV 層まで、木の根、耕作によるカマ掘り等が達していた。

遺構はすべてピットであり、その状態は次のようである。

#### ピットー1

現状ではⅢ層から掘り込まれ、平面では隅丸長方形を示す。規模は上端で 100 ×79 cm、下端で91 ×64 cm、深さ48 cmで底はレベル原点から −65 cmを計る。ピットは直に掘られており、底は水平で、長軸を磁北に向けている。ピットの埋土は、底にⅢ層と砂質ローム・ブロックの混土層が約20 cm堆積し、その上に瓦等の遺物を含むⅢ層が約30 cmの厚さ堆積している。底は非常に硬く、石などは認められない。このピットはピットー2を切って造られている。

#### ピットー2

現状では、IV層から掘られており、平面隅丸長方形を示す。北の一部をピットー1に切られており 長径は不明である。その規模は上端で長辺( $84+\alpha$ )cm、短辺91cm、深さ25cmで底のレベルは最も 深い所で-49cmを計る。ピットは直斜状に掘られ、底はほぼ水平であり、長軸は磁北に向いている。



挿図−6 Fトレンチ東壁付近の状態

ピット内は、白色粘土のブロックを含むⅢ層が埋めていた。 底は硬いロームで、石は認め られなかった。

#### ピットー3

Ⅲ層から掘り込まれ、平面 形は隅丸長方形を示す。東の 一部は未掘であるが底の状態 からするとあとわずかである。 規模は上端で(60+α)cm× 78cm、下端で70×60cm、深さ 77cmで底はレベル原点より一 95cmを計る。ピットは直に掘り込まれ底は水平で、長軸は N-20°-Wにふれている。ピ

ット内には、焼土と炭化物の小粒をより多く含むⅢ層がレンズ状に堆積し、その下にC軽石を含む 軟かい褐色土に砂質ローム・ブロックを含む層が埋まり、底となる。地層断面図には現われていない が、ピット上部にピットを埋めるように砂質ロームが堆積していた。ピット内には石は認められな かった。

#### ピットー4

III 層から掘り込まれ、平面形は隅丸長方形で北の部分が完全に掘り出されていない。規模は上端で長辺( $41+\alpha$ ) cm、短辺65 cm、下端で長辺( $33+\alpha$ ) cm、短辺45 cm、深さ77 cmを計る。底はレベル原点より-86 cmである。ピットははば垂直に掘り込まれており、底は水平である。長軸はN-28.5 Wにふれている。ピット内は砂質の--ム・ブロックにIII 層を含む層が $33\sim57$  cm 堆積し、C軽石を含む褐色のやわらかい層があって底になる。ピット内に石は認められなかった。

#### ピットー5

III層から切り込まれた状態を示すが、III層がピット内を埋めている。北半がトレンチ北壁にかかり、未発掘である。規模は現状で $43\,\mathrm{cm} \times (34+\alpha)\,\mathrm{cm}$ 、深さ $35\,\mathrm{cm}$ 、底は水平でレベル原点より $-47\,\mathrm{cm}$ を計る。ピット下半は径 $38\,\mathrm{cm}$ 、深さ $22\,\mathrm{cm}$ で直に掘られているが、上半は、直斜状あるいは階段状になっている。ピット内には石は認められなかった。

ピットー6

深い耕作により現状ではIV層から掘り込まれていたが、ピット内はII 層が埋まっていた。平面形は矩形で、その規模は、上端で長辺 $43\,cm$ ×短辺 $36\,cm$ 、下端では $30\times20\,cm$ 、深さ $45\,cm$ を計る。ピットは直に掘られ、底は水平で、長軸をW-23—Sに向けている。底はレベル原点より $-75\,cm$ で、ピット内に石は認められなかった。

以上のようであるが、ピットー2は深さ27cmと浅く、掘り込み方も斜めであるが、建築遺構に伴う柱穴跡と考えられる。他のピットも、その形状等からして柱穴と考えられる。従ってピットー1~6は、何らかの建築遺構の存在を示す柱穴と考えられる。

柱穴は、ピットー2を除き全て垂直に掘られ、底は全てが水平につくられている。ピットー1とピットー4の間に長径20~30㎝の河原石が3個あったが、ピット中にはいずれも認められなかった。埋め土から見ると柱穴は II 層を中心とするものと、II 層を中心とするものとに分けることができる。 II 層が埋める柱穴はピットー5・6の2個である。ピットー6は角柱が建てられていたと思われる事や、底も28㎝低くく、ピットー5と異なるようである。心心270㎝を計る。III 層が埋める柱穴は、長軸の走向と規模から2つに分けられる。磁北に平行し規模の小さいピットー3・4とになる。ピットー1とピットー2は平面形は同じであるが、底のレベルは異なり、ピットー2を切ってピットー1が掘られている。その距離は心心85㎝を計る。ピットー3・4を比較するとピットー4は規模がやや小さく、底のレベルもやや高い。心心距離は217㎝を計る。

地層からして、ピットー5・6はII層が埋まっている事から他に比して新しいものと思われる。他のピットー1・2・3・4はII 層が埋まっている点においては共通するが、ピット間の切り合いからすると、ピットー2よりピットー1・3がより新しくなる。特により新しいピットー3はその規模・長軸の方向・心心距離からしてピットー4と何らかの関係があると思われる。非常に狭い範囲で確認された事であり推定の域を出ないが、同一建築遺構を示す柱穴列の一部と思われる。

# Ⅳ. 遺 物

本年度の調査によって発見された出土遺物を大別すると瓦類、鉄製品、土器類であり、これらは ダンボールみかん箱に約40箱分あった。以下、そのうちの主な物について記述する。

#### 1. 瓦類

多量の遺物の大半は瓦であった。ほとんどが細かくくだかれた小破片であったが、軒丸瓦片11個体分、軒平瓦片15個体分、文字瓦4個体分等、特徴のあるものも発見された。丸瓦・平瓦についても注目すべきものがあるが、整理が完了していない段階であるので、軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦等を中心に述べる。

#### (1) 軒丸瓦

#### ① 素弁蓮華文瓦 (図7-1,図20-1)

素文縁の周縁と内区に棒状の隆起線が1本みられるのみで、瓦当面全体の構成は不明である。周縁は直立縁で縁高12cm,縁幅1.3cmである。胎土良好、焼成堅牢、灰白色を呈している。Aトレンチ表土層出土。なお、この瓦に類似したものが、すでに本遺跡において発見されていることが、紹介されている。 (注 1.)

#### ② 複弁蓮華文瓦

複弁蓮華文と判断されるものが7点あった。完全なものは1点もなく、いずれも小破片であって、 部分的なことしか判明しないが、以下、表によって表わす。

,									
図番号 (写真)		出土	.地	概 要 および 測定値	胎	土	焼成	色	調
7 – 2	20-2	Cト (Ⅲ層		花弁端円形反転形式。 素文縁。縁高1cm、縁幅1cm。背面 はヘラ削り、接合部剥離痕あり。	細	1	堅	灰	青
7 – 3	20 – 3	B ト ( II 層	- 1	花弁端円形反転形式。 素文縁、縁高1.2cm、背面に接合部剥 離痕。	多夾雑物		堅	灰	白
7 - 4	20 – 4	Bト (II 層		花弁端円形反転形式。蓮子がみられるが、磨耗著しく構成不詳。背面はヘラ(もしくは刷毛)整形。厚さは薄い。	旌	通	堅	赤	褐
7-5	20 — 5	C ト ( III 層		花弁端円形反転形式。背面に接合部 剥離痕。 厚さ約1.6cmの粘土板を芯にして、数 mmの厚さの粘土を瓦当面と背面に上 塗りしている。蓮華文は上塗りの面 に施されている。	内 - ( <sup>杂</sup>	惟物多)	堅		灰白赤褐
7-6	20 - 6	B ト ( II 層		複弁であるが小片のため、その他不詳。	遊	通	堅	灰	白
7 – 7	20-7	A ト ( <b>II</b> 層		文様面に、布目の痕跡が認められる。 ぞから粘土の分離をよくするために 布を使用したのであろう。	和	8	堅	灰	青
7-8		Bト (II 層	.	花弁端円形反転形式。素文縁、縁高 1 cm、縁幅1.6cm。背面に指圧痕がみ られる。	紅	Ð	堅	灰	青
7 – 9		Cト (加層		素文縁、縁高1 cm、縁幅1.8cm。背面 に接合部剥離痕。接合をよくするため めの刻み目がある。	刹		堅	灰	褐

表-1 複弁蓮華文瓦一覧

とのほか、複弁蓮華文瓦の ─部とみられるものが 2 点あったが詳しいことはつかめない小破片である。

以上の10点の複弁蓮華文瓦は、それぞれ形状、色調が少しずつ異なる別個体の部分であるが、いくつかの共通点を指摘し得る。周縁の残存していた4点はいずれも直立した素文縁であること、花弁端の残存する5点はいずれも円形反転であること等である。一方、図20-5の良質粘土による上塗りの認められるものや、図20-7の文様面に布目の認められるものなど、製作技法上注目すべき

個別の特色をもつものも指摘される。

(2) 軒平瓦 軒平瓦は重弧文瓦のみであった。これもすべて小破片となっている。以下、表によって示す。

図番号 (写真)	図番号 (拓本)	出土	地	概 要 および 測定値	胎土	焼成	色調
	21 — 1	Cト ( <b>11</b> 層		三重弧文。厚さ3.7cm。凹凸面ともに、 横なで整形のあとがみられる。	多少の雑物	堅	灰白
8-2	21-2	B ト (Ⅱ層		三重弧文。厚さ3.8cm。凹凸面ともに、 横なで整形のあとがみられる。	細	堅	灰青
8-3	21 – 3	Bト (Ⅱ層		凹面寄りが剥落している。剥落部は 一面を成している。 現存では弧が2本であるが、施文方 法は前述の図21-1、図21-2と類 似しており、同様な三重弧文と推定 される。	細	堅	灰青
8 – 4	21-4	Bト (Ⅱ層		三重弧文。凸面寄りの弧1本が欠落し、それは凸面にも及んでいる。凸面の剥れた下には、明瞭に一面が認められる。これは、芯となった平瓦の凸面とみられる。	雑物多少あり、焼成で小石が突出している。	堅	灰青
8-5	21-5	Fト ( <b>Ⅲ</b> 層		凹面寄りの2本の弧がみられる。三 重弧文のうちの1本が欠落したもの であろう。凹面に布目がみえる。	普通	堅	表面 灰白 内部 黄褐
8-6	21-6	Bト ( II 層		凹面寄りが欠落しているが三重弧文とみられる。厚さ約3.7cm。凹・凸面ともに横なでの整形がされている。右側面に幅1 mm、深さ0.5mmほどの沈線が1本ある。また、割れた断面中央部に0.6cm幅にヘラを横に強く押しつけてできたような線が1本みられる。	細	堅	灰白
8-7	21-7	Bト (Ⅱ層		三重弧文。厚さ3.4cm。割れ口を観察すると、胎土は均質になっており、平瓦と瓦当部を接合させた痕跡はない。凹面・凸面ともに、横なで整形のあとがみられる。	細	堅	表面 灰青 内部 茶褐

三重孤文。厚さ32cm。かなり高温で 焼かれたらしく表面は溶けてガラス 質に変化しはじめている。凹面の割 れた下からは、布目のついた面がみ える。これは、平瓦を作製してから 瓦当を接合させたことを示すもので ある。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、 平瓦には、検骨痕の凹凸も認められ る。   8-9 22-9   8 トレ に横なで整形								
8-8 21-8				三重弧文。厚さ3.2㎝。かなり高温で	· 			
8-8       21-8       B トレ (II 層中)       れた下からは、布目のついた面がみ える。これは、平瓦を作製してから 瓦当を接合させたことを示すものである。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、平瓦には、棲骨痕の凹凸も認められる。       細         8-9       22-9       B トレ 三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも (多少維物)       座 灰 白         8-9       22-9       B トレ に横なで整形       (多少維物)       座 灰 白         8-10       22-10       B トレ に横なで整形       (多少維物)       座 灰 白         8-10       22-10       B トレ に横なで整形       (多少維物)       座 灰 白         8-10       22-10       B トレ に横なで整形       (返しの弧が残っているが、全体の厚さからして、3 本以上の弧であった可能性もある。週面に布目・凸面に最高がある。うまる。2 本の細い陰刻縁による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る平円を含むたないである。2 本の細い陰刻縁による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に横骨痕と市目が明確に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が横骨痕と直をしている。2 本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に横骨痕と直をしている。 へラによる沈線が無造作につけられている。 ムー面は横なで整形している。 ヘラによる沈線が無造作につけられている。 瓦当の文様以配したものか、窓図してとのように製作したものか、窓図してとのように製作したものか、のは損したものか、のは頂したものか、のは頂したものか、のは頂したものか、のより、凸面には浅い類をこしらえ       細       座 灰 青				焼かれたらしく表面は溶けてガラス				
8-8       21-8       Bトレ (II 層中)       える。これは、平瓦を作製してから 瓦当を接合させたことを示すもので ある。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、平瓦には、模骨痕の凹凸も認められ る。       細         8-9       22-9       Bトレ (II 層中)       三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも (多少雑物)       無         8-10       22-9       Bトレ (II 層中)       2本の弧が残っているが、全体の厚 さからして、3 本以上の弧であった 可能性もある。弧の1つ1つは合形 に近い断面であり、ひとつの弧は比 軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に 職目がある。平瓦との接合でなく、1本作りのようである。       細       堅       灰 黄         9-11       22-11       Aトレ (II 層中)       形のくぼみがあるが、それ以外はへ ラで整形されている。側面もへう整形されている。側面もへう整形されている。側面もへう整形されている。の側面に横向偏があたった部分の圧痕が模骨痕と布目が明瞭に残る。また、布痕があたった部分の圧痕が模骨痕に直交していた部分の圧痕が模骨痕に直交していた部分の圧痕が模骨底に直交していた。凸面は横なで整形している。へうによる洗練が機造作につけられている。気・凸面には複で整形している。へうによる洗練が機造作につけられている。風面の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、製作途中のものか、破損したものか、現りである。凹面には有目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ       細       堅       灰 青				質に変化しはじめている。凹面の割				
11 層中   瓦当を接合させたことを示すものである。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、平瓦には、横骨痕の凹凸も認められる。   平瓦には、横骨痕の凹凸も認められる。   2 本の弧が残っているが、全体の厚さからして、3 本以上の弧であった可能性もある。弧の1つ1つは台形に近い断面であり、ひとつの弧は比解的幅が狭い。凹面に布目・凸面に敲目がある。平瓦との接合でなく、1 本作りのようである。 2 本の細い陰刻線による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円形のくぼみがあるが、それ以外はへりで整形されている。般類形式である。 2 本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に使骨痕と布目が明確に残る。また、布の端があたっに間層中)に部分の圧痕が模骨痕と面をがあたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。				れた下からは、布目のついた面がみ				
8-9   22-9   B トレ   三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも   細   変   灰 白	8-8	21-8						
平瓦には、模骨痕の凹凸も認められる。   三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも   細			(Ⅱ層中)	瓦当を接合させたことを示すもので	細	堅	灰	青
8-9   22-9   B トレ   三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも   細   (多少維物)   堅   灰 白   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本				ある。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、				
8-9       22-9       Bトレ (IM層中)       三重弧文。厚さ3 cm。凹・凸面とも (多少雑物)       配 (多少雑物)       堅 灰 白         8-10       22-10       Bトレ (IM層中)       2 本の弧が残っているが、全体の厚さからして、3 本以上の弧であった可能性もある。弧の1つ1つは台形 に近い断面であり、ひとつの弧は比 軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に 敲目がある。平瓦との接合でなく、1 本作りのようである。 2 本の細い陰刻線による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円形のくぼみがあるが、それ以外はへラで整形されている。側面もヘラ整形されている。側面もヘラ整形されている。段類形式である。 2 本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に棲骨痕と布目が明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が横骨痕に直交している。				平瓦には、模骨痕の凹凸も認められ				
8-9 22-9 (II 層中) に横なで整形 (多少雑物) 堅 灰 白 2 本の弧が残っているが、全体の厚 さからして、3 本以上の弧であった 可能性もある。弧の1つ1つは台形 に近い断面であり、ひとつの弧は比 軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に 敲目がある。平瓦との接合でなく、1 本作りのようである。 2 本の細い陰刻線による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円 形のくぼみがあるが、それ以外はへラで整形されている。側面もへラ整形されている。段類形式である。 2 本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に横骨痕と布目が明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が横骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。 へラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してとのように製作したものか、製作途中のものか、破損したものか、割 堅 灰 青 不明である。凹面には待目と横骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ				る。				
R	0 0	00 0	Bトレ	三重弧文。厚さ3㎝。凹・凸面とも	細		-	
8-10 22-10 Bトレ (II 層中)       さからして、3本以上の弧であった 可能性もある。弧の1つ1つは台形 に近い断面であり、ひとつの弧は比 軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に 敲目がある。平瓦との接合でなく、1本作りのようである。         2本の細い陰刻線による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円 形のくぼみがあるが、それ以外はへラで整形されている。側面もヘラ整形されている。段類形式である。       細 堅 灰 白         9-12 22-12 Bトレ (II 層中)       Bトレ 明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。ヘラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してのように製作したものか、製作途中のものか、破損したものか、現作途中のものか、破損したものか、現りである。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ       細 堅 灰 青	8-9	22-9	( II 層中)	に横なで整形	(多少雑物)	堅	灰	白
8-10       22-10       Bトレ(II 層中)       可能性もある。弧の1つ1つは台形 に近い断面であり、ひとつの弧は比軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に蔵目がある。平瓦との接合でなく、1本作りのようである。       細       堅 灰 黄         9-11       22-11       Aトレ(III 層中)       形のくぼみがあるが、それ以外はへラで整形されている。側面もヘラ整形されている。側面もヘラ整形されている。段類形式である。       細       堅 灰 白         9-12       22-12       Bトレ(II 層中)       財際に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。へラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、酸損したものか、酸性したものか、酸性したものか、酸性したものか、砂脂である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には洗い顎をこしらえ       細       堅 灰 青				2本の弧が残っているが、全体の厚				
8-10       22-10       Bトレ (II 層中)       に近い断面であり、ひとつの弧は比 軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に 敲目がある。平瓦との接合でなく、 1本作りのようである。       細 堅 灰 黄         9-11       22-11       Aトレ (III 層中)       形のくぼみがあるが、それ以外はへ ラで整形されている。側面もへラ整形されている。段類形式である。       細 堅 灰 白         9-12       22-12       Bトレ (II 層中)       明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。 凸面は横なで整形している。 へラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、 意図してこのように製作したものか、 で明である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ       細 堅 灰 青				さからして、3本以上の弧であった				
***				可能性もある。弧の1つ1つは台形				!
報的幅が狭い。回園に布目・口面に 融目がある。平瓦との接合でなく、 1本作りのようである。 2本の細い陰刻線による三重弧文。 厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円 形のくぼみがあるが、それ以外はへ ラで整形されている。側面もヘラ整 形されている。段顎形式である。 2本の幅広の陰刻線による三重弧文。 厚さ約1.9cm。凹面に模骨痕と布目が 明瞭に残る。また、布の端があたっ (II 層中) た部分の圧痕が模骨痕に直交してい る。凸面は横なで整形している。 ヘラによる沈線が無造作につけられ ている。瓦当の文様は乱れており、 意図してこのように製作したものか、 製作途中のものか、破損したものか、 不明である。凹面には布目と模骨痕 があり、凸面には浅い顎をこしらえ	8-10	22-10	i .		細	堅	灰	黄
1本作りのようである。   2本の細い陰刻線による三重弧文。   厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円   形のくぼみがあるが、それ以外はへ   ラで整形されている。側面もヘラ整形されている。段顎形式である。   2本の幅広の陰刻線による三重弧文。   厚さ約1.9cm。凹面に模骨痕と布目が   明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。   凸面は横なで整形している。   へうによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、   意図してこのように製作したものか、   製作途中のものか、破損したものか、   製作途中のものか、破損したものか、   取りである。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ			[(Ⅱ層中)	軽的幅が狭い。凹面に布目・凸面に				
9-11 22-11 Aトレ				敲目がある。平瓦との接合でなく、	-			
9-11       22-11       A トレ (III 層中)       厚さ約3.6cm。凹面は布目の残る半円 形のくぼみがあるが、それ以外はへ ラで整形されている。側面もヘラ整形されている。段顎形式である。       細 堅 灰 白         9-12       22-12       B トレ (II 層中)       明瞭に残る。また、布の端があたっ に部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。 つうによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、 意図してこのように製作したものか、 でいる。 原営している。 ないるの文様は乱れており、 意図している。 不可による沈線が無造作につけられている。 瓦当の文様は乱れており、 意図してこのように製作したものか、 でいる。 瓦当の文様は乱れており、 意図してこのように製作したものか、 の方には流れており、 意図してこのように製作したものか、 の方には流れており、 意図してこのように製作したものか、 の方には流れており、 意図してこのように製作したものか、 の方には流れており、 意図してこのように製作したものか、 の方に対象が無力に対象が無力に対象が無力に対象が無力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が無力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象がある。 四面には流り表力に対象がありますに対象が表力に対象がありますに対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象がありに対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象が表力に対象がありに対象が表力に対象が表力に対				1本作りのようである。				
9-11 22-11 (III 層中)       形のくぼみがあるが、それ以外はへ ラで整形されている。側面もヘラ整 形されている。段顎形式である。       細       堅       灰 白         9-12 22-12 (II 層中)       日本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に模骨痕と布目が明瞭に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。       細       堅       灰 黒         9-13 22-13 (II 層中)       日本の中の上痕が模骨痕に直交している。       本の主による沈線が無造作につけられている。       本の主による沈線が無造作につけられている。       なら、直当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、現上のたものか、現上のたものか、現上のたものか、現上のたものかのか、破損したものかのからいよりには表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表に表				2本の細い陰刻線による三重弧文。				
(III 層中)       ラで整形されている。側面もヘラ整形されている。段顎形式である。         2本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に模骨痕と布目がり時に残る。また、布の端があたった部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。小ラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、意図してこのように製作したものか、高図してこのように製作したものか、不明である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ       細       堅       灰       東				厚さ約3.6㎝。凹面は布目の残る半円				
形されている。段顎形式である。  2 本の幅広の陰刻線による三重弧文。 厚さ約1.9cm。凹面に模骨痕と布目が 明瞭に残る。また、布の端があたっ に間層中)に部分の圧痕が模骨痕に直交してい る。凸面は横なで整形している。 へうによる沈線が無造作につけられ ている。瓦当の文様は乱れており、 意図してこのように製作したものか、 意図してこのように製作したものか、 のである。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ	9 11	22-11			細	堅	灰	白
9-12 22-12 Bトレ 明瞭に残る。また、布の端があたっ 細 堅 灰 黒 一 明瞭に残る。また、布の端があたっ に 層中 た部分の圧痕が模骨痕に直交している。 凸面は横なで整形している。 へうによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、 意図してこのように製作したものか、 1 層中 不明である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ			[(Ⅲ層中)	ラで整形されている。側面もヘラ整				
9-12 22-12   Bトレ   明瞭に残る。また、布の端があたっ   田   田   田   田   田   田   田   田   田				形されている。段顎形式である。				
9-12 22-12   Bトレ   明瞭に残る。また、布の端があたっ   細   堅   灰 黒   た部分の圧痕が模骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。   へうによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、   意図してこのように製作したものか、   である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ				2本の幅広の陰刻線による三重弧文。				
(II 層中) た部分の圧痕が模骨痕に直交している。 る。凸面は横なで整形している。				厚さ約1.9㎝。凹面に模骨痕と布目が				
3。凸面は横なで整形している。	9 - 12	22-12	1		細	堅	灰	黒
9-13 22-13 Bトレ 製作途中のものか、破損したものか、 I 圏中) 不明である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ			(Ⅱ層中)	た部分の圧痕が模骨痕に直交してい				
7 にいる。瓦当の文様は乱れており、 意図してこのように製作したものか、 8 トレ 製作途中のものか、破損したものか 細 堅 灰 青 不明である。凹面には布目と模骨痕があり、凸面には浅い顎をこしらえ				る。凸面は横なで整形している。	·	ļ		
9-13 22-13 Bトレ				ヘラによる沈線が無造作につけられ				
9-13       22-13       Bトレ 製作途中のものか、破損したものか (II 層中) 不明である。凹面には布目と模骨痕 があり、凸面には浅い顎をこしらえ       細       堅 灰 青				ている。瓦当の文様は乱れており、				
(Ⅱ 層中) 不明である。凹面には布目と模骨痕 があり、凸面には浅い顎をこしらえ				意図してこのように製作したものか、				
があり、凸面には浅い顎をこしらえ	9 -13	22-13			細	堅	灰	青
			[Ⅱ層中]	不明である。凹面には布目と模骨痕				
ている。				があり、凸面には浅い顎をこしらえ				
				ている。				

表-2 重弧文軒平瓦一覧

これらのほかにも、重弧文瓦の弧の一部とみられるものが2点出土している。(図9-14・15)以上、重弧文瓦を形状から大別すると、弧の曲線を浮き出させたものと、端面を陰刻したものとの2種類になる。また、瓦当の製作過程から大別すると、平瓦の端面から直接瓦当を作り出したものと、平瓦の端面に別の粘土で瓦当を接着したものとの2種類になる。いずれにしても、2~3の

ものを、除いて、おおむね三重弧文瓦の一部とみられる。

#### (3) 文字瓦(図23-1·2·3·4)

文字瓦は4点であるが、うち3点は文字の部分まで欠損しているため文字の全体ではない。また、 どちらの方向から見るかわからないものもある。

#### (4) その他の瓦

 $\boxtimes 23 - 5$ 

数㎜四方の四角の穴が凸面上にならび、凹面に布目がみえる。厚さ1.3㎝、灰黒色。残欠のため全貌は不明。

 $\boxtimes 9 - 16$ 

厚さ4cmもあり、原形はかなり大きなものであったと推察される。残欠のためどのような瓦であったのかわからないが、鬼瓦の一部とも考えられる。

 $\boxtimes 9 - 17$ 

凹面に灰釉のかかった瓦である。自然釉であるが施釉したものであるかは、判断ができないが、 施釉のようにもみえる。凸面には丹が塗られているようである。

瓦類をまとめてみると、その出土地点はBトレンチの瓦の推積地点が圧倒的に多く、したがって 軒丸瓦・軒平瓦の出土地もBトレンチが多い。Bトレンチの瓦の推積下にはB軽石層があることや 関連する遺構がみあたらないことから、建築物の倒懐した状態とみるよりは二次的な推積をみる方 が自然で、遺構と遺物を結びつけて考えることはできない。他トレンチ出土の瓦も、遺構との関連 ではとらえられない。軒丸瓦・軒平瓦の時期は、白鳳から奈良時代にかけてのころとみられるが、 さらに詳細にわたっての検討は今後の課題である。

#### 2. 鉄製品

鉄 釘 (図23-6 · 7 · 8)

鉄釘は3本発見された。いずれも銹化が進み、原形が損われている。これらの釘の計測値は、全長12cm・(錆ぶくれして幅の計測不能)、全長6.3cm・ $5 \times 6$  nm,全長3.6cm・ $3 \times 4$  nm 角の3 本でいずれも角釘である。出土位置を順に示すとEトレンチ・Bトレンチ・Dトレンチである。

なお、Bトレンチからは鉄釘のほか鉄滓も出土している。

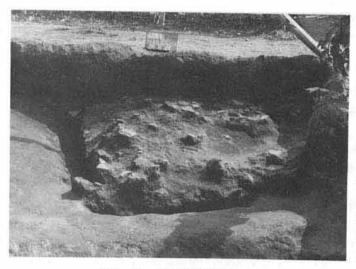
#### 3. 土器類

土器類のうち、完形のものは1点しかなかったが、欠損部を補いほぼ原形を知り得るものを器形によって分類して述べると次のとおりである。

#### (1) 高台付埦形土器 (図10-1, 図24-1)

土師器。Aトレンチピットーハ・Ⅲ層中に高台を上に向けて出土した。全体の3分の1は欠損しているが、底部は残っている。器高4.5cm。風化が進み器表および内部はだいぶ荒れており、数カ所にわたって表面が丸くはがれている。底部には、はりつけ高台がしっかりとつけられている。丸くはげたところから推測すると、高台をつけた後、上塗りをしてろくろで整形しているものと思われる。内部の底には渦巻状のろくろ痕がみられる。器体部は内湾しながら立ち上がり、口辺部において心

もち外反する。胎土はあまりよくなく、焼成軟質、灰褐色を呈している。器表にはうっすらと炭化 物の付着したあとがみえる。また、内部においても底部や口辺部にかけてかなり明瞭に炭化物がみ られる。



插図-7 3号住居遺物出土

#### (2) 坏形土器

① (図10-2・図24-2)| 完形の土師器。口径11cm,器 高3.5cm。 Cトレンチ 3 号住居跡 の埋土中より出土した。平たい 丸底である。内傾した立ち上が りの口辺で、内傾しはじめるあ たりの境目でにぶい稜線が一周 している。口辺部および内部は、 構なでに整形されており、とくに 内部は整っている。しかし、器 表稜線以下、底部にかけて、各 方向から荒くヘラ削りされてい る。胎土中には多少夾雑物が含

まれている。器形全体にゆがみ

があり、真上から見た形も少しいびつである。焼成良好・茶褐色である。

#### ② (図10-3・図24-3)

土師器。2分の1欠損。口径10.8 cm・器高3.4cm。Cトレンチ3号住居跡埋土中より出土。①とき わめて類似しているが、①に比して、底部から口辺部にかけての立ち上がりが強いこと、整形がや やていねいなことが異なる。

#### ③ (図10-4 · 図24-4)

土師器。3分の2欠損。正確な口径・器高は不明であるが、それぞれ10cm・3.2cm前後とみられる。 口辺部のつくりは①・②に類似しているが、①よりいっそう平たい丸底である。器表は、底部を中 心としたへう削りと口辺部の横なで整形の境目あたりまで黒色になっている。内部は、口辺部近く まで黒色になっているが、部分的に剥がれており、地の茶褐色がみえる。胎土中に多少の夾雑物を 含む。焼成は普通である。

#### ④ (図10-5・図24-5)

土師器。4分の1欠損。口径11.5cm・器高3.6cm。Cトレンチ3号住居跡埋土中より出土。平たい 丸底であって、やや内傾した立ち上がりの口辺であるが、前記①ほど口辺部との境は明瞭でなく、 素縁口辺に近い。器表・内面とも、ていねいに横なで整形して仕上げている。胎土・焼成ともに良 好である。赤褐色。

#### ⑤その他

土師器の坏形土器の破片が数片あり、そのうち口辺部が10数点みられた。いずれも①から②まで と同様な内傾する口辺部で、横なで整形している。出土地はCトレンチ3号住居跡中である。

#### (3) 境形土器 (図10-6,図24-6)

須恵器。2分の1欠損。口径、器高の正確な数値は不明であるが、それぞれ13.6 cm, 5.2cm 前後と みられる。器表および内部はろくろで整形している。底部は平底に近い丸底で、ろくろを回転させ ながら、ヘラ削りの整形をしている。そのため、同心円状の削り痕が認められる。胎土緻密・焼成 良好である。

#### (4) 蓋 (図10-7, 図24-7)

須恵器。4分の1欠損。Cトレンチの出土である。蓋のつまみの部分は高台を取り付けるのと同じ手法を採り入れ、円を描くように粘土紐が蓋本体に接合されている。その直径は7㎝である。蓋本体の直径は12.9㎝であり、ろくろを使用して作られている。つまみの内部にあたるところにはうっすらと糸切り痕が認められる。この蓋と組になる器がどのようなものであるか不明であるが、その口縁部と接合したと思われるところに磨耗痕がみられる。蓋が口縁部からはみ出す部分はていねいに整形されており、内に隠れる部分はやや荒い仕上げである。胎土緻密・焼成良好・灰色である。

以上、器形が明確なものについて述べたが、次に、器形は判らないほどの破片となっているが、 特色のある小破片についてその種類別に以下に記する。

(1) 二彩片 (図11-8)

小破片であるが、緑と白の施釉がみえる。三彩であった可能性もある。Bトレンチ出土。

(2) 緑釉片 (図11-9, 図24-8)

高台付の塊か皿の一部とみられる。高台はつくり出しであり、高台の接地面近くに浅いくりこみがあり、高台を一周していたものと思われる。胎土は緻密で焼成良好である。 E トレンチ出土。

(3) 灰釉陶器片

底部に窯印のある高台付灰釉陶器片の境の一部(図11-10)。その他、口辺部(図11-11)など  $2\sim 3$  点出土している。いずれも Bトレンチ出土。

- (4) 須恵器片
- ①頚部片 (図11-12, 図24-9) Bトレンチ出土。
- ②ボタン状の丸い突起のついたもの(図11-13)。この突起の中央には指で押したようなへこみがあり、突起の下にはヘラ書きの沈線がある。背面には自然釉がかかっている。(図11-14)の斜めにヘラ書きの沈線が入ったものも背面に同様な自然釉がみられ、両者とも同一個体の一部とみられ、出土地も同じCトレンチである。
- ③器表にはしま模様がみられ、自然釉がかかっている。内面には吸盤のような丸い敲目がみられる。 ( $\boxtimes 11-15$ ,  $\boxtimes 24-10$ ) Cトレンチ出土。
  - ④底部片(図24-11)。炭化物が付着しており、底部には糸切り痕がみられる。

以上、土器類の記述中、Cトレンチ3号住居跡埋土中出土の土師器坏は、いずれもほぼ同じ型式であって、編年上奈良時代のものと比定されるものである。また、Aトレンチピット―ハ出土中の高台付埦形土器は平安時代のものとみられる。

その他

砥石と思われる石(図11-16),石製の臼玉(図11-17,図24-12),環状の銅製品(図11-18) 古銭(図11-19)がある。古銭は磨耗著しく文字不明である。

(注1) 『飛鳥・白鳳の古瓦』(奈良国立博物館)昭和45年・P. 291、素弁蓮華文(1)の8。『前橋市史』第1巻(前橋市)昭和46年 P. 618 ~ 619

### ▽ 結語

(1)

山王廃寺跡の中核をなすものは、塔跡およびその中心礎石である。この礎石の発見は、大正年間のはじめのことであり、日枝神社境内の掃除の際、ゴミを埋めるための穴を掘った時に、偶然発見されたと伝えられている。その後、大正10年、福島武雄氏等によって発掘調査され、東西8尺9寸(約2.67m)、南北8尺2寸(約2.46m)、厚さ5尺余(約1.5m以上)の、周囲に根じめとして玉石をつめた巨大な礎石が確認された。そして、その表面は平らに削られ、中央には径65cm、深を17cmの柱受が掘りくぼめられ、その中央には径26cm、深さ30cmの舎利孔があり、更に、柱受の周囲には、径1.09m、幅5cm、深さ3cmの環状の溝が、そして、ほぼ同規模の放射状の溝が、これから東西南北の四方に刻まれていることも、同時に確認された。(表紙写真参照)

また、こうした中心礎石の所在する辺りは、周囲の地面より約60㎝高くなっていることから、基段が構築されていたことも明らかとなり、その基段上には、心臓を中心に内側に4個、外側に12個の礎石の存在が推定され、間口3間、奥行3間の一辺約12mの塔のあったことが考察されるにいたった。なお、この基段の大きさは、先年、水道管敷設の際に基段の端と考えられる部分が発見された由で、その地点が、中心礎石から約12mであったことから、一辺約20mの方形と推定されるにいたった。

なお、またこの中心礎石の舎利孔の造法は、奈良薬師寺の西塔跡に比較的類似していることが指摘され、この建立の時期およびその形状ならびに規模等は、ほぼそれに近いものとみられてきた。

(2

前記、中心礎石および塔基段についての記載の中にみる、中心礎石表面上の環状構および放射状構について、その例は全国的にも聞かない。現在のところ、この山王廃寺塔の中心礎石のみにみられるものであり、それだけにその性格なり機能については、興味あふれるものがあり、古くから話題となってきた。即ち、川村清一博士の換気溝説、石田茂作博士の排水溝説、そして尾崎喜左雄博士の排湿溝説などがある。これらは、直接な目的は異なるが、いずれも柱根部の腐蝕防止という点では一致しており、また、湿気を抜くためのものとみられている前記薬師寺西塔の中心礎石柱受孔の底部外縁に沿う周溝と、それから外方に通ずる円孔の存在を思う時に、まことに至当な見解とみられる。

しかし、こうした見解についても、改めて検討してみると、いくつかの疑問が感じられる。特に、 放射状溝について、その主なことを記すと、

- 1. その方向を、何故、ほぼ東西南北としなければならなかったか
- 2. 排湿あるいは排水の施設とした場合、果して、これだけの造作を必要としたのか等である。

そこで、改めて放射状溝について、その性格を検討してみることにした。

まず、その示す方向について、磁石をもって計測してみた。舎利孔の中心を基準とした結果は、 次のとおりである。

北方溝 N-5 → E

南方溝 S-5°-E

東方溝 E-5°-S

西方溝 W-4°-N

よって、これらの溝は、90度の角度をもって、ほぼ東西南北の方向を指すことが知れる。しかし

厳密には、例えば南北線についてみると、平均して北に向かって5度東へふれることになる。

ところで、磁石の方向は、この前橋の辺りでは昭和42年においては真北より、約6度40分西へふれているとされるが、今から1200年前に当る奈良時代の北極星の位置は磁北より東へ4度数10分の位置にあったと聞く。従って、若しこれが事実だとすれば、中心礎石上の放射状溝の南北線の北方延長線上に、北極星が位置することになる。よって放射状溝の方向は、正しく北極星を基準として決定されたものと推定され、塔中心礎石の放射状溝の性格については、かかる点に特に注目したい。

古代時院の伽藍が南面することや、北極星の信仰がすでに奈良時代にあったことは、周知の事実である。ここに北極星を基準として、方向を定めたと思われる古代寺院が出現する。身近な例をもってすれば、上の国分寺はその典型とされよう。他方、古代建築の方法と形態を今日に伝える伊勢の内宮は、その本殿の床下に鎮底された「心の御柱」が、社殿の設計の際の方向、尺度の基準とされると聞く。しからば、山王廃寺の設計・建立に当って、この中心礎石が方位・尺度の基準あるいは基点となったのではないだろうか。このように考えた場合、放射状溝は、湿気等を抜くためのもの以上に、山王廃寺の建立の際の方位と尺度を決定する基準となったものではないだろうか。

(3)

昨年に始まった山王廃寺跡の発掘調査は、塔中心礎石を基準として実施された。即ち、寺域の推定を目的とした昭和49年度の調査においては、これを起点として、磁北を基準に東西南北各方向の発掘調査のなし得る要所で行った。その結果、塔中心礎石から北方へほぼ1町(約109 m)離れた区域において、巨大な掘立柱の建築遺構を検出し、これが、その位置などからして、北門跡と推定されることとなった。このため山王廃寺跡は、塔中心礎石を中心として、ほぼ二町四方と推定されるにいたった。

本年度の発掘調査は、昨年度の調査結果を踏まえ、はじめの中心礎石の東北方約50mの位置とした。この位置を選んだのは、この地には、早くから礎石の存在が確認されてあり、建造物跡とみられていたことと、この部分の一角に、近い将来家屋の建築が予定されていることであった。しかし実施に当っては、地権者の意向もあって、礎石の配列されている部分は不可能となり、それに隣接する部分の調査に終った。調査は、8月18日から31日までの間、群馬大学歴史研究部学生、県立前橋工業高校歴史研究部の生徒諸君の献身的な協力により行なわれた。その概要は前に記した通りであるが、これを要約すると、概ね次のとおりである。

#### ① ピットについて

明らかに古代の掘立柱建築の柱穴痕とみられるもの6個、中世あるいはそれ以降の柱穴痕とみられるもの5個、ほかに、性格ならびに時代不明のもの7個が確認された。

② 竪穴住居跡について

奈良時代前半期とみられる竪穴住居跡3個の存在を確認した。

③ 溝および瓦片の堆積について

浅間山 B軽石(1108年あるいは1281年噴出)を含んだ地層に覆われて、ほぼ東西方向に走る幅平均1.1m、深さ13cmの横断面は浅いU字状の性格不明の溝を確認した。また、その部分には多量の瓦片の堆積をみた。ただし、このB軽石層を含んだ層の堆積は、二次堆積層とみられるので、溝および瓦片堆積の時期には、尚、検討の余地がある。

④ 出土品について

ダンボール箱約40箱分の古瓦と、土師器片、灰釉陶器片、緑釉陶器片、二彩陶器片、ほかに、 鉄釘などがあった。古瓦のうち、軒丸瓦は、複弁蓮華文、軒平瓦では三重弧文が主体をなし、 これらは、白鳳期から奈良前期にかけてのものと推定される。

以上、調査の結果について記したが、確認された遺構について、今回の調査では、時間的、経費

的等の制約もあって、充分にその性格を解明することができなかった。従って、掘立柱の建築遺構 竪穴住居跡、そして、瓦の堆積した溝等の規模・形状・そしてその性格の把握は、山王廃寺との関 連の有無を併せて、今後、解明しなければならない大きな課題となった。かかる意味において、こ の度の発掘調査は、ここにあらわれた結果よりも、むしろ今後この地域の調査の大きな指針となる ものであり、その意義することは大きい。

(4)

山王廃寺は、その存在を示す遺構および遺物より、全国的にも稀にみて豪荘、華麗な寺院と推定され、そこには全国的にも卓越した群馬の古墳文化の結実と、東方の雄国上野国の原点がある。しかし、その現状をみると、あまりにも解明されない面が多く、また、各種開発等による破壊の危険も大きい。こうした中にあって、前橋市教育委員会では、長期的な学術的な発掘調査を計画し、国庫ならびに県費補助を得て、ここに第2年次の発掘調査を実施した。その調査概報の結語を稿するに当って、この山王廃寺の中心的遺構である塔中心礎石の放射状溝について問題を提起し、併せてこれを基準として実施された発掘調査の結果をまとめた。こうした発掘調査とその結果が、これに付随して提起された塔心礎の放射状溝の問題と共に、今後、古代史研究の重要な史料として、あるいは貴重な文化財としての山王廃寺解明の諸調査に寄与すること多いものと信ずるものである。



図1 発掘地点付近 松の木の根元が塔心礎



図2 Aトレンチ内ピットーイ

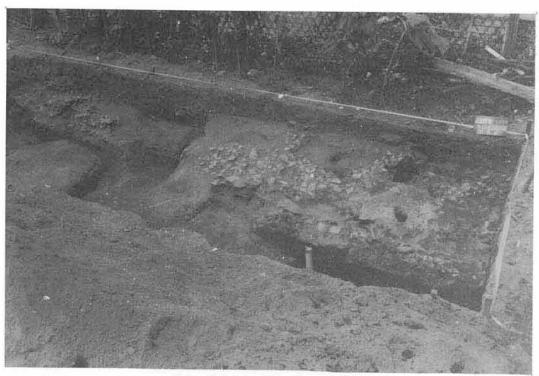


図3 Bトレンチ内 瓦の出土状態

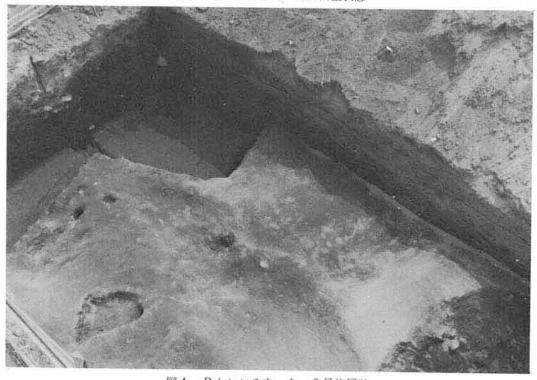


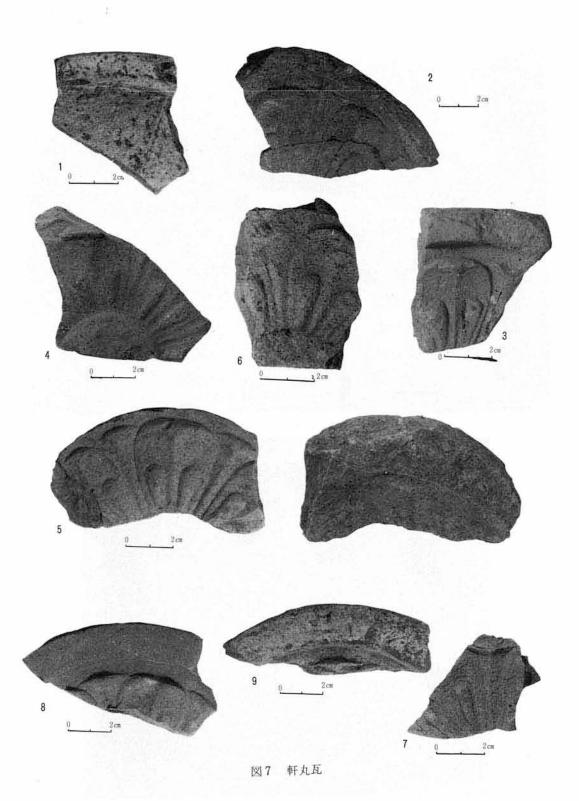
図4 Bトレンチ内 1・2号住居跡



図5 Eトレンチの状態



図6 Fトレンチの状態



- 26 -

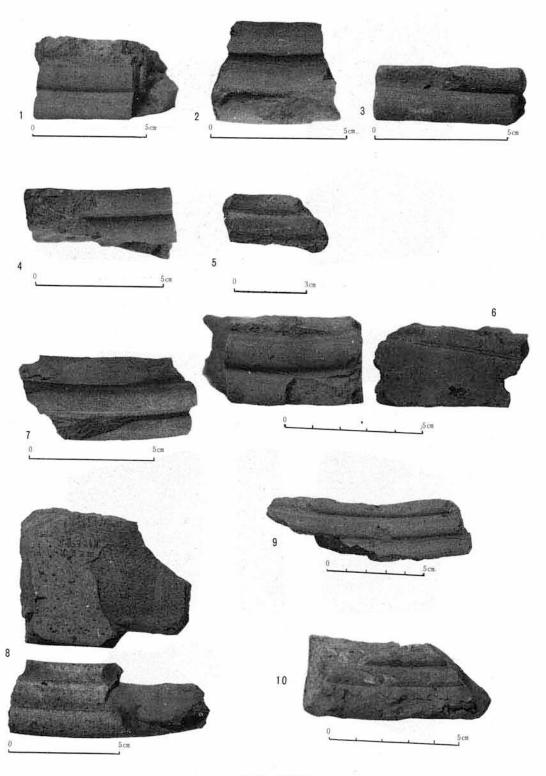


図8 軒平瓦 - 27 -

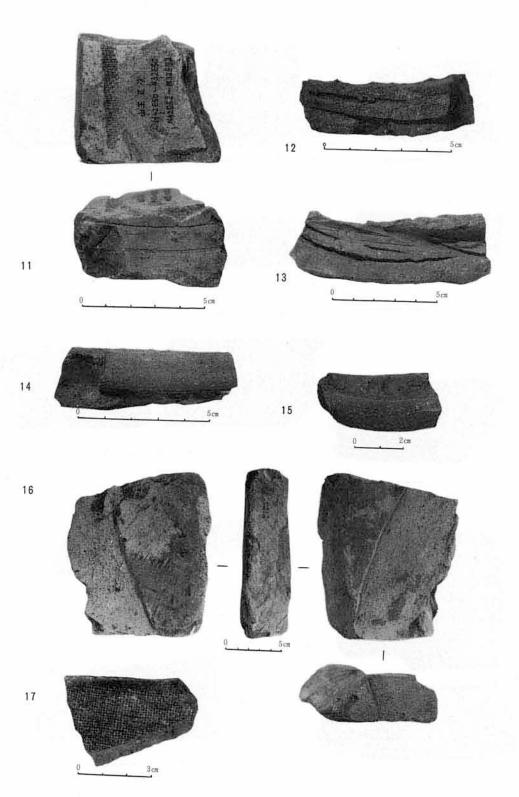
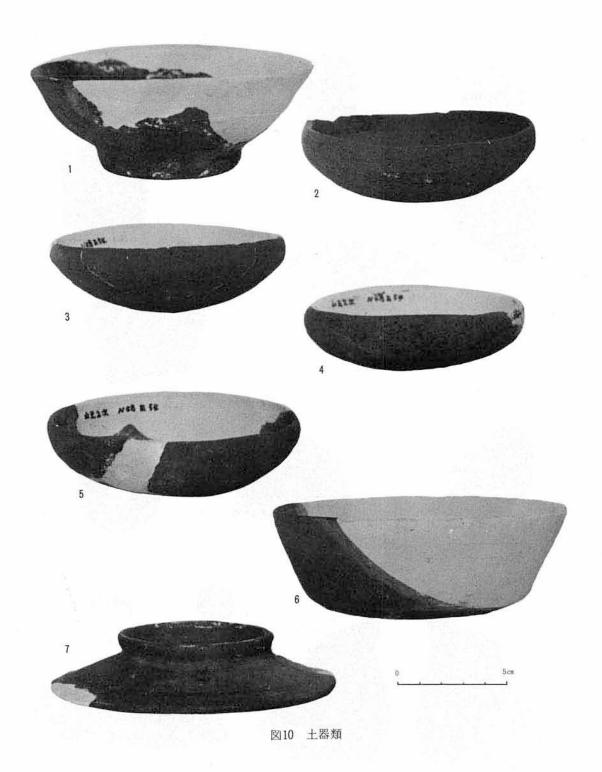


図 9 軒平瓦・その他の瓦 - 28 -



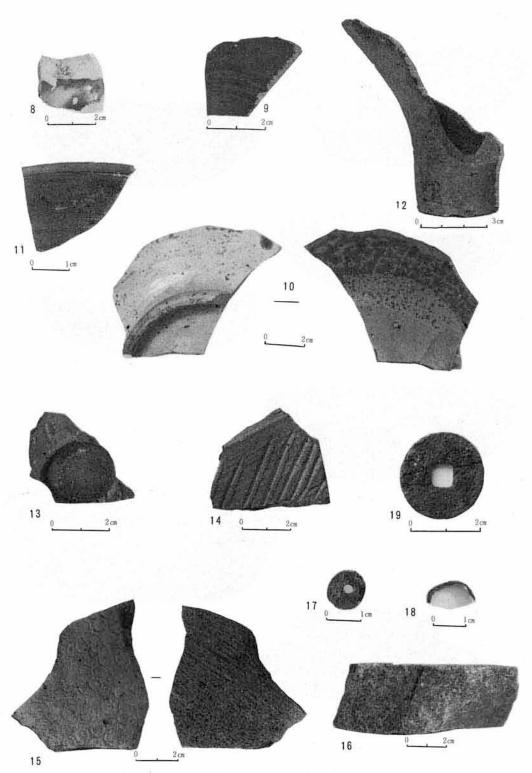


図11 土器・その他

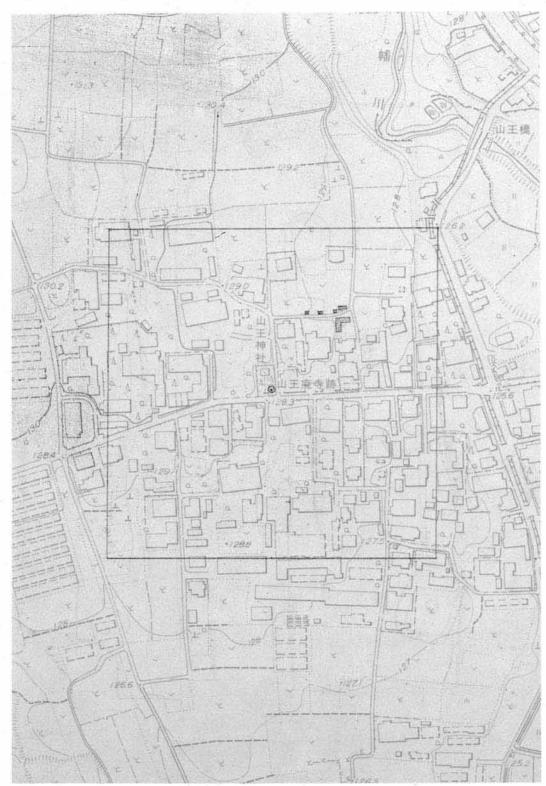


図12 山王廃寺跡現況図 (2.500分の1)

図13 Aトレンチ平面図および西側地層実測図

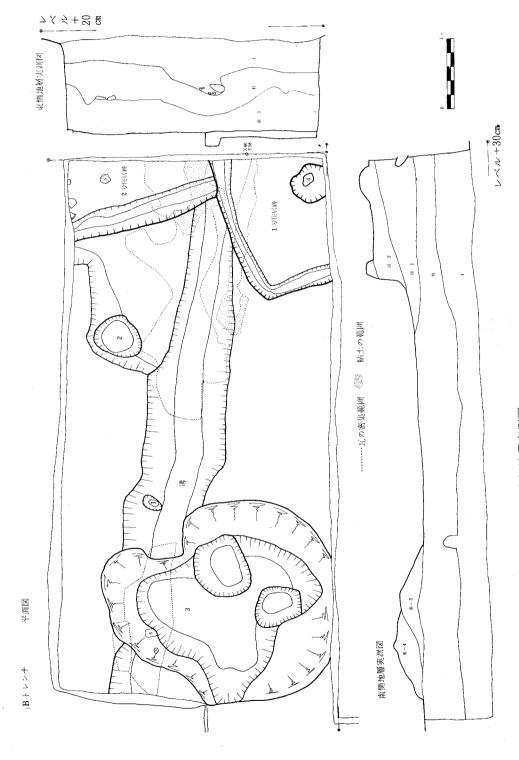
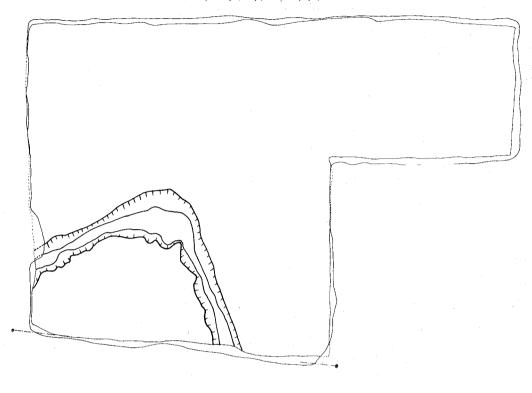


図14 Bトレンチ平面図および東側・南側地層実測図

# Cトレンチ (3号住居跡) 平面



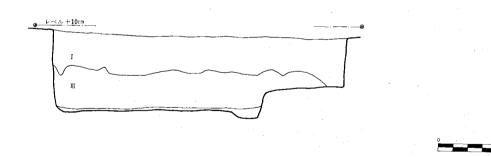


図15 Cトレンチ平面図および南側地層実測図

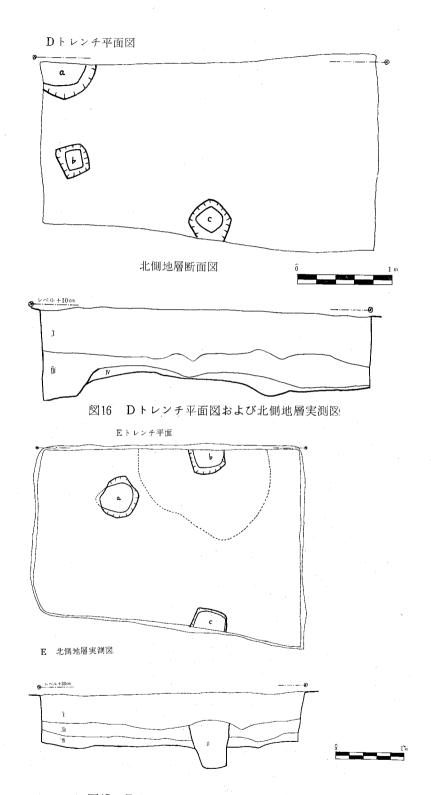


図17 Eトレンチ平面図および北側地層実測図

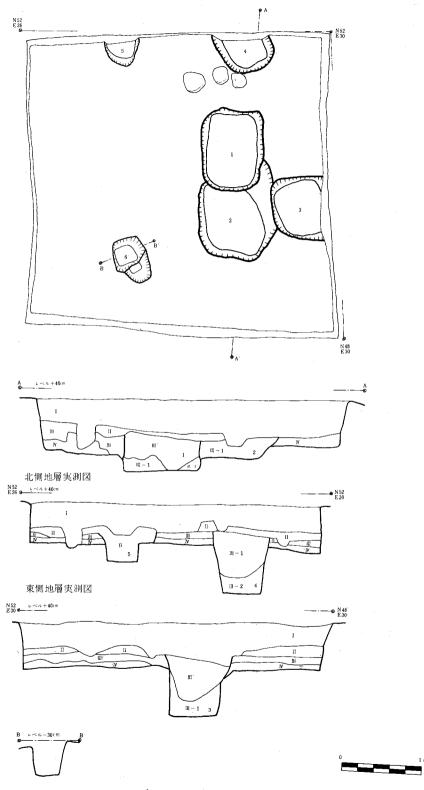
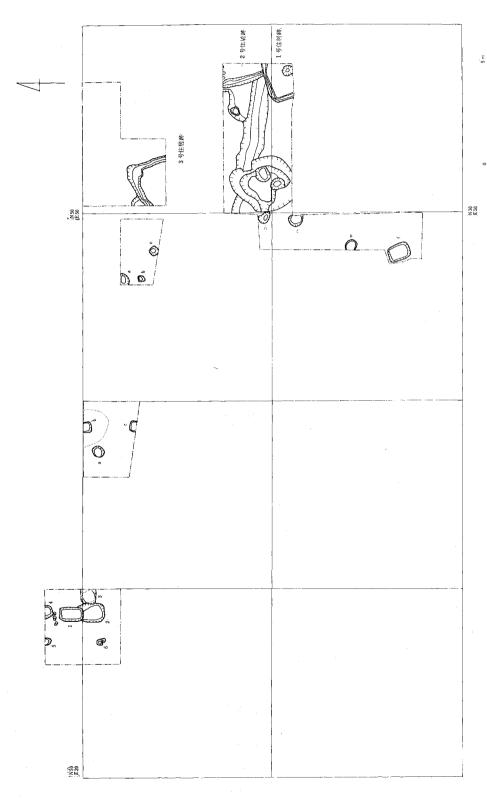


図18 Fトレンチ平面図および地層実測図



- 37 -

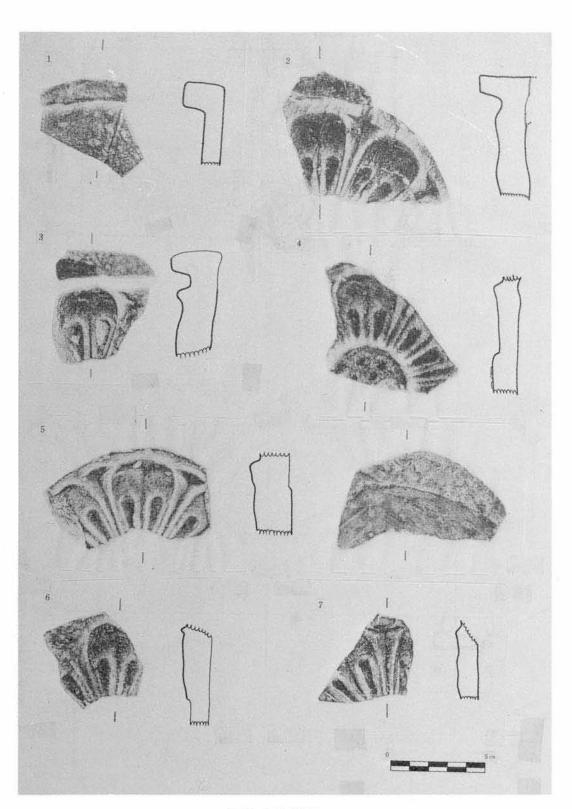


図20 軒丸瓦拓本 - 38 -

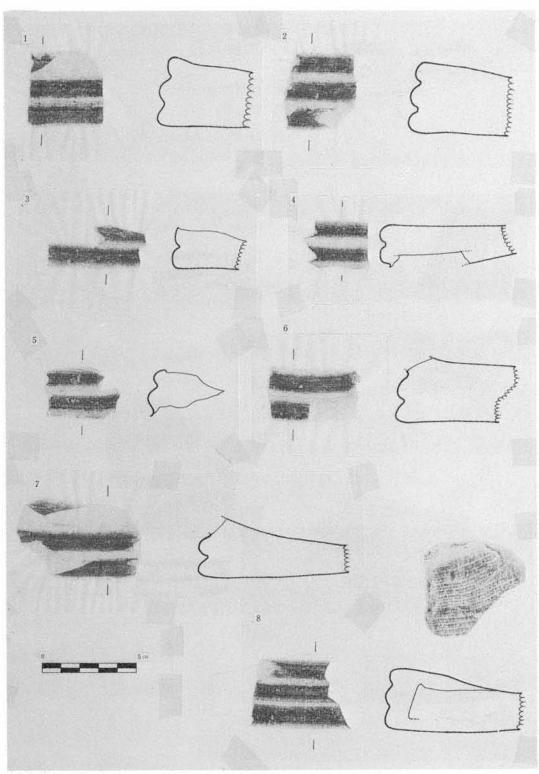


図21 軒平瓦拓本(1) - 39 -

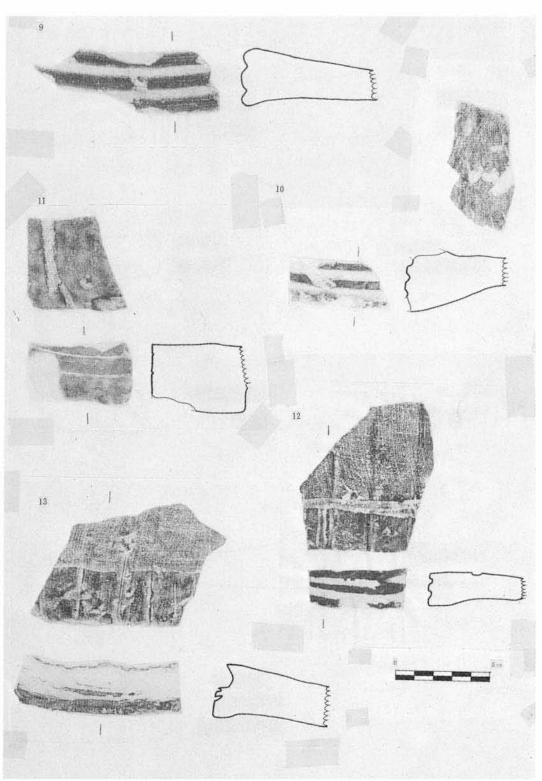


図22 軒平瓦拓本(2) - 40 -

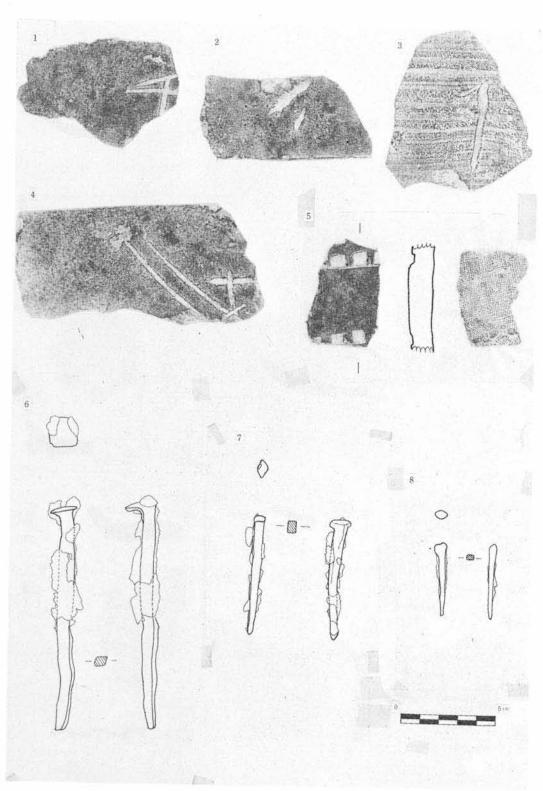


図23 文字瓦・その他の瓦拓本・および鉄釘実測図 - 41 -

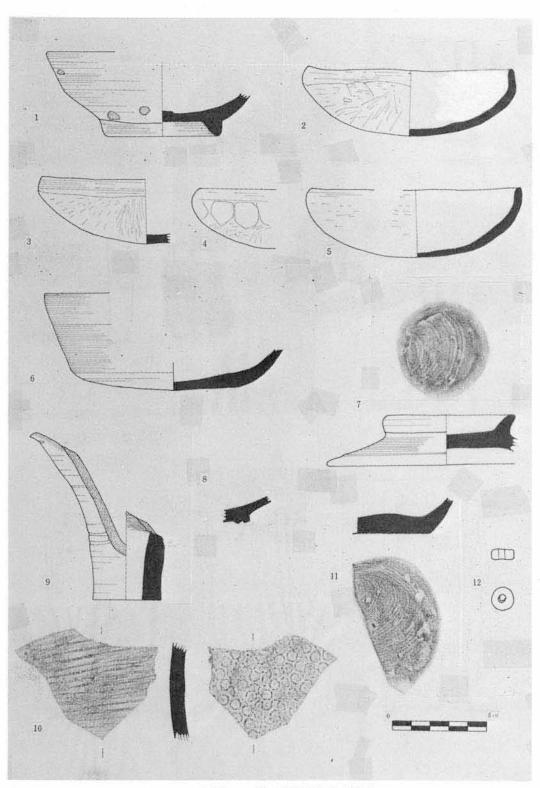


図24 土器類その他の実測図および拓本 - 42 -

山王廃寺跡第 2 次発掘調査概報 昭和51年 3 月31日 印刷 昭和51年 3 月31日 発行

> 印刷 有限会社 原田印刷所 発行 前橋市教育委員会 前橋市大手町二丁目11番1号 電話(0272)24-1111